

## TIME MOVE



想像能力を持った人間が繰り広げる  
未来社会のビジネスストーリー

## 【推奨環境】

この E-book 上に書かれている URL はクリックできます。できない場合は最新の AdobeReader をダウンロードしてください。(無料)

<http://www.adobe.co.jp/products/acrobat/readstep2.html>

## 【著作権について】

この E-book は著作権法で保護されている著作物です。

下記の点にご注意戴きご利用下さい。

この E-book の著作権は作成者に属します。

著作権者の許可なく、この E-book の全部又は一部をいかなる手段においても複製、転載、流用、転売等することを禁じます。

この E-book の開封をもって下記の事項に同意したものとみなします。

この E-book は秘匿性が高いものであるため、著作権者の許可なく、この商材の全部又は一部をいかなる手段においても複製、転載、流用、転売等することを禁じます。

著作権等違反の行為を行った時、その他不法行為に該当する行為を行った時は、関係法規に基づき損害賠償請求を行う等、民事・刑事を問わず法的手段による解決を行う場合があります。

この E-book に書かれた情報は、作成時点での著者の見解等です。著者は事前許可を得ずに誤りの訂正、情報の最新化、見解の変更等を行う権利を有します。

この E-book の作成には万全を期しておりますが、万一誤り、不正確な情報等がありましても、著者・パートナー等の業務提携者は、一切の責任を負わないことをご了承願います。

この E-book を利用することにより生じたいかなる結果につきましても、著者・パートナー等の業務提携者は、一切の責任を負わないことをご了承願います。

## INDEX

### □はじめに□

■第1話 タイム・ムーブ者資格■

■第2話 海底都市への依頼■

■第3話 マーカスの野望■

■第4話 バーチャル・エリア■

■第5話 未来データ加工■

■第6話 会社と組織■

■第7話 ミッション・ショック■

## 未来会社 Time Move

### 1. タイム・ムーブ社

現在、2025年の6月。2040年、2060年・・・  
自分の能力では、現時点から未来に対して50年間までがタイム・ムーブの限界だ。タイム・ムーブとは自身の想像を映像に変えることができる力だ。

昨日も、クライアントの依頼で確か、2040年へ意識を移動させた気がするが、2020年の東京オリンピックも終え、年号も変わり、世界のビジネスはAIとベンチャー企業の成長、大手企業の減衰、ライフスタイルの変化で急速に変わった。日本企業も世界の受託企業から変わろうと周回おくれの努力をしはじめた。

未来の話など、暇なやつに語らせておけばいいと相手にしなかった経営者、投資家も、今は現場にいない。現場にいるのは、大企業の経験なき、新しいベンチャー経営経験者、採用されるのはその仲間。ライフスタイルもワークスタイルも大幅に一変し、新経営者は見えないそれに対応するのがスマートであり、改革といえた。もはや従前生産スタイルの改善では生き残れなくなった。

俺の能力が開花したのは2018年、想像したイメージが当時のVR端末を使っている途中で、偶然一部が表示されて気がついたのだ。その後、タイム・ムーブ社からスカウトされ今に至る。大手企業や若手ベンチャー経営、それを取り巻くさまざまな社会インフラで成長を阻害する仕組みに自ら体験したこともイメージを造ったきっかけであったのではないだろうか。そのような現実体験があまりにも未来を想像できない社会への反発で誘発されたのかもしれない。

未来イメージは脳内で初期生成され、外部の同様なコンセプトメーカーから入るデータ・集合知と合わさり拡張される、その未来イメージと意識をマッチングさせることができるのだ。ホログラフィックやVR端末へ想像したイメー



ジを表示させ、時間をずらしてマッチングさせるテクノロジーが開発されたのは5年前。企業はそれらの未来イメージを先取りし分析し、未来商品を開発、コンセプトモデルを専用サイトやバーチャルサイトで出し始め、未来の顧客獲得へ動き始めた。

どこまで未来を“見れる”センスがあるかが、我々未来企画会社の売りというわけだ。未来への“見れる精度”が高ければ高いほど報酬も高い。当然、AIもあるが人間の右脳を新しいセンシングとしてマーケットは見ているようだ。未来イメージはAIなどで企業分析され、精度診断されるが同じような結果では他社を出し抜けない。そこで、結局は企業の戦略が問われるようになるのだが、それでも見れる、想像できる（能力）は年数レンジで金額も異なる、俺は現時間から50年先までが限界。他にも70年、90年、120年と先を想像できる能力者はおり金額が高い。一番安価は10年、30年が普通である。

今までは、“想像”は個人が勝手におこなうものであったが、いつの頃からか目的の為に利用すると利益になると考えた投資家や資本家は“想像”＝“能力”と認識しはじめた。必然的にマーケットが形成されはじめ、想像力の高い脳力のある者をコンセプトメーカーと呼び、それらから想像（未来）データを表示させる端末をタイムムーブ端末と呼ばれるようになった。それら技術を有するのはコア技術を持つ、タイム・ムーブ社とそれをサービスで利用するワールド・アイズ社であり、どちらも世界企業だった。

俺の会社は米国タイム・ムーブ社の技術を使ったマイクロ・コンサル会社であり、タイム・ムーブ・ジャパンとして代表を引受けている。いわばパートナー会社の1つだ。オフィスは新宿駅東口はずれにあり、日本国内での想像ビジネスの拡充をおこなっている。

2018年頃から大手企業の機能やサービスのマイクロ化やベンチャー化が進み、ダウンサイジングならぬコンポーネント化がおこなわれはじめた。それでも社員の実質的な行動までにはおよばず、先にスタートアップで起業した経営者もの達は失敗しながらも、新しいネットワークを築き上げ、その差は広がるばかりだった。

最近では、その差を埋める為に、未来投資や新しいライフワークサービスや新ビジネスワークサービスをマーケット認識し始め、様々な業界変化が見える形でおきはじめた。保険業を筆頭に、“金融”、“製造”、“不動産”、“流通”、“通信”などの各業界も新しい流れに変異していつていることに気づき出し

た。

つまり、想像力を持っている若い者や起業者に評価投資をし始め、企業もその力を逆に借りてビジネスリードしようと考えた。冷静に考えれば、当たり前のことのようにだが、社会的な制度や仕組みが今までなかったのだから仕方がない。

複数の想像は、見える化と評価がされた瞬間、未来ビジネスマーケットに変化したのである。

また、タイム・ムーブ社の契約チームとしては以下の者たちがいる。全員で5人だ。

デザイナー(映像化) “ケイン”

ホログラフビジョナリスト (タイムムーブ端末 API) “トオル”

コンセプター (未来コンセプト入力) “ケンジ”

シナリオメーカー (クライアントシナリオ作成) “ユリ”

データサイエンティスト (マーケットデータ、技術データ) “マユミ”

タイムムーブ社のメンバーはそれぞれ、固有の個性と能力を持ち過去のキャリアについては、まったく影響しない。むしろ、想像力スキルがあるかどうか

問われる。能力がないとイメージ化されないからだ。タイム・ムーブ社の端末を頭に着けるには資格が必要であり、個人の趣味や空想では利用できなく事前承認が必要だ。デバイスは専用周波数とスキャン処理により脳内イメージされたものを“想像空間”と言われるタイムムーブ社の専用デジタル空間情報にアダプタで増幅されマッピングする。そこから“コンセプター”と言われる人のコンセプトを集め、脳内で初期イメージされた像をバーチャル空間で合成し、ホログラフ化させる。さらに、その際に抽出されたデータを解析し、顧客へ販売する。

重要なのは、想像空間を時間軸でコントロールできる点。他のコンセプトの意見やイメージを合成できる点だ。

上記のメンバーはそれぞれの役割のプロフェッショナルであるが、働き方は自由だ。何時に出社してもよい。登録社員だが、当然、時間拘束はない。皆、個人ベースでの基本契約+案件となる。但し、チームリーダーの指示に従うの

が条件。社長がチームリーダーである。

会社が供給するのは必要経費と会社とホログラフィック通信可能な web デバイス、タイム・ムーブ研究室、総務・経理的な仕事は入力のみ個人あとは本社

AI サービスにておこなう（本社・AI が全面バックアップ 1 時間/日以上 本人にさせてはいけない規定）。

これ以外のリソースはないので、各個人がユニークに想像力や業務効率を高める端末を自由に用意している。機器を含めてメンバーの紹介をしよう。

例えば、ユリは、小型の超高速検索ソフトを入れた専用デバイスにもっており、独自ネットワーク網をもっているオタクだ。困ったときは頼りになる。タイム・ムーブ社内はホログラフィックフォンかホログラフィック通信によるデバイスでコミュニケーションされる。

また、タイム・ムーブ端末は、能力者のみが装着可能だが、アダプタを変えることによりタイムゾーンを2倍まであげることができる。ホログラフィック表示

で、想像空間イメージされたものをメンバーは見るすることができる。

タコスとは、TIME MOVE ACCESS COMMUNICATION SERVICE の略で、本社が提供している通信ソフト。未来想像空間と現実空間で通信が可能。

ケインは、デザイナーだが、グラフィックとソフトウェア開発にも強く。自分専用のホログラフィック作成ツールとデータベースを持ち、短時間でバーチャル空間と想像空間のイメージ出力ができる。急ぐときは頼りになる。

トオルは、個人では専用機器はなく。会社が与えた API やツールを正確に使いこなす。正確さと純粋さは必要だ。

マユミは、いわば司令塔の役割。専門技術的なことはないが、トータルマネジメント、たまに熱いパッションが出る。思いとマネジメントは最も重要だ。

ケンジは、コンセプターとして通常ネットやバーチャルサイトからコンセプトを集約する担当。進むべき道を悩んでいる青年。前を向こうとする姿勢は好感。

という、俺を含めた合計6人で設定されたビジョンとテーマを基にタイム・ム

ームをおこないクライアントの未来シナリオを描く2025年の未来会社の物語だ。さて、最初のクライアントはどこになるか？

## 2. 海底都市への依頼

「ボス、クライアントから電話っす」

狭いオフィス内で大きい声で、しかも品のない受け答えをしているのはタイムムーブ端末のソフトウェア、API開発を担当しているトオルだ。トオルは28歳、米国の有名大学を卒業したが一流企業に行かず、何故かうちにいる。彼もタイムムーブ社の契約社員だ。ホログラフなどの画像技術は超一流だ。タイムムーブ社は全世界の拠点に優秀な技術者を配置しており本社には置かないという噂だ。そもそも本社が未来にあるのか、現在にあるのかさえよく解らない。

「わかった、変わる」

俺：「電話かわりました。イマダです。」

「イマダさん、ご無沙汰です。先回のお話ですが、社内で調整が済みましたので

是非、2040年への海底都市テーマムーブお願いできませんか？」

俺：「海底都市ですか、こんなことを言うのは失礼かもしれませんが、どうせなら宇宙都市開発とかの方がいいのでは？」

「逆ですよ。皆が宇宙や農業ビジネスに手を出し始めているのは理解しますが、我々は海底を攻めたいのです。海底だと水資源に困ることもありませんし技術も今の段階でもかなりね。」

俺：「了解しました。詳細打合せは後日連絡させていただきます、では。」

海底都市か…電話先のクライアント企業は中堅商社である。商社も仲介ビジネスの在り方を模索しなければいけなくなってきているようだ。」

俺：「トオル」

トオル：「はい」webを何やら見ながら、返事だけ返ってきた。

俺：「メンバーを集めろ。明日10:00に会議だ」

トオル：こちらに振り向いて「こんどのテーマは何ですか？」

俺：「2040年、海底都市だと宇宙ならパターンがあったのにな。」

トオル：「ホログラフィック設定がムズイツすね 環境変化も考慮にいれないと…」腕を組みながら、座っている椅子を回して言った。



俺：「そんなこと知らん。が、頼むぞ」

「あっ、それとボスはやめてくれ、イマダさん、って呼んでくんないかな」

トオル：「はい、ボス」

翌日の社内の会議室。5人のメンバー内4人が揃っていた。

社内で集まって会議というのは、ホログラフ会議ばかりだとなんとなく味気ないが、やはり実際に会う方が実感がある。

俺：「…という訳だ。タイム・ムーブは今週の金曜 19:00におこなうのでそれまでに各自準備しておいてくれ。」

デザイン担当のケインが、とんでもないという顔をしながら、手を左右に振って「無理無理。」

俺：「何で？」

「ボス。まだ解ってないですね。タイムムーブするのはあなたかもしれないけれど、他のコンセプターからのデータを入れてデザイン調整がないとホログラフ化できないんですよ。それにどのくらいの事前準備が必要だと？最低あと1週間は必要です。」

データサイエンティストのマユミが口を挟む。

「そうね。中途半端なデザイン調整されたんじゃ、こちらも正しい解析ができないわ。後で私のせいにされたくないから1週間後の月曜日 PM 10:00はどうかしら？」「2040年なら、デザイン調整より、ムーブ後の解析が重要よ。」

「賛成」

俺としてはこう言うしかない「民主主義ということで、月曜に。スタンバイよろしく。解散」

会社といっても、小さい。小さい会社を動かしているのは、皆の合意だ。何より強い。その中でも女性の意見は尊重しないと、というかしないとつぶれる。

タイムムーブ社の日本支社でもあるオフィスは、居室と会議室スペースの他にタイムムーブできる部屋（研究室）がある。脳波を測定できる小部屋みたいなものだが、少し違うのはアダプタと言われる増幅機を経由してタイムムーブ端末（VR 端末のような）を頭に装着しイメージ化するのだが、大きく3つのステップになる。 本人が未来意識し指定された年数を指定されたテーマで想像

するとタイムムーブ技術により映像化される。これが初期イメージでステップ1ある。ここに他のコンセプトの情報融合させ、統一された未来イメージを生成するステップ2。このデータを取り出して解析するのがデータサイエンティストの役割だ、つまりステップ3。この3つの処理をそれぞれの担当者がおこない“売れるもの”に仕上げていく。いわば未来データを生産し、加工し、販売するというと解り易いかもしれない。工場は脳内にある想像分野だ。

月曜のPM10:00 研究室モニター

トオル：「ボス準備いいですか？」

俺：「ok」

トオル：「装置装着確認。目標 2040 年。テーマ 海底都市でセット。」

ケンジ：「コンセプトからのテーマ情報準備」

ケイン：「ホログラフィック API アクティブ」

マユミ：「解析用トレーサビリティ アクティブ」

トオル：「タコス オン」

俺：「タコス？ これから食うのか？」

トオル：「先月からタイムムーブ社 US がムーブするときは、TACOS を起動しろという連絡だったので。要はムーブ中でボスと連絡できるコミュニケーションツールらしいです。正式には Time Move Access Communication System らしいですけどみんなタコスって呼んでますね。」

トオル：「では、タイムムーブ起動します。」

コンセプトのケンジが「ちょっと待って、まだバーチャルサイトからのコンセプト情報をアップするの忘れてました。後3分ください。」

マユミ：「ちょっと、仕事は遅れる為にあるのではないのよ。ところで、今回は何人の海底都市に関するコンセプトデータを集めたの？」

ケンジ「すいません、300人ほどですか。。あっ、終わりました。」

トオル：「では、改めてタイムムーブ起動します。」

と、俺の目の前の端末が明るくなり、意識は想像していた 2030 年の海底都市世界へムーブした。

2040年

15年後の未来か。海底都市なんか、想像とは言え、まだ出来ているイメージが浮かばなかったが、他のコンセプターのイメージも融合されているのでどのような映像がでてくるか実は俺にもわからなかった。

目の前に現れたのは一つの観光船だった。しかも水中を航行している、どうやら自動運行だ。もっと映像を注意深くみると、観光船の行先は水中プラントシティ

であり、海底火山や水素エネルギーを生成し、それを運ぶロボット観光船だった。

人間はどこに？水上に目をやると、新しい食物工場ドームがところせましと並んでおり、まさに農地が海上に浮いてエネルギーは海中で、天候コントロールは衛星にておこなう移動型の巨大ITプラントだった。シティはそのプラントの一部にしかすぎないようだった。然し、食物やエネルギー生産が主な役割で生活の機能を果たしていないのが映像から伺えた。

意識がぼやけはじめてきた。映像もとぎれとぎれだ。

トオル：「ボス、ボス、聞こえますか？ タコスで通信しています」

「そちらの映像が途中から入らなくなりました。どうかしましたか？」

俺「うーん、誰だ。やっと人間が出てきたぞ。お前はだれだ？このプラントに人はいないのか？水中の生産管理はだれがやっている、国か？企業か？それとも共通プラットフォームとして運用しているのか？」

トオル：「何、わけの分からないこといってるんですか？ タコス使えねーダメだ。」

マユミ：「戻しましょう。意識モード 現在。バーチャル空間 オフ、ホログラフィック機能 オフ」

目の前が一瞬暗くなり、昔のブラウン管テレビのスイッチを切ったような、切れ方をしたかと思うと、また明るくなり、いつものオフィスの研究部屋内。

俺「戻ってきたか…」

トオル：「ボス、お帰りなさい。どうしたんですか？映像が切れて心配したんですよ」

俺「う…ん。どうやら妨害されたいらしい。」

全員：「えっ？」

俺「つまりだな、未来で人間が出てこない訳だよ。理由は2つ。1つは、コン  
セプターの情報が人間が登場しない未来に偏っていたということ。」

ケンジ：「ありえない」

ケイン：「で、もうひとつは？」

俺「もうひとつは、人間の未来情報だけ抜かれたということ。」

ケイン：「誰にですか？タイムムーブ社のセキュリティ技術ではそんな簡単に他社  
は入り込めないはずですがね。ましてや一部の想像空間情報だけを盗むなんて  
できるはずがない」

俺「そう思う。」

俺「実はさ、今回の海底テーマの依頼から問題があるのではと踏んでるのだ  
が？」

トオル：「出ました。ボスのホームズ化。」

マユミ：「データを解析してみたら何かわかるんじゃないかしら？ユリにも手  
伝ってもらおうわ」

トオル：「任せたよワトソン君」

マユミ：「お前もやれ、私、レディーだし。」

ということで、会社を挙げて謎の追求が始まった。

### 3. マーカスの野望

位置情報—オフィス近くのカフェ

ユリ：「なんだ、私のいない間にそんな面白い事やってたの。」

先日の社内会議に参加できなかったユリが、マユミに愚痴をこぼしていた。  
うちでは会議に参加しないとプロジェクトへの参加権を失うような、かっこ悪  
い、面白いチャンスを失うという意識・雰囲気全員にあった。

マユミ：「面白い事って、休暇を取ってたあんたがついてなかつのよ。それに  
まだ、面白いかどうか調べないとわかんないし。助けてよ。」

頼んだモカを口に一口啜りながら

ユリ：「確かに、未来データに人の情報が入らないのは、おかしいわね。コン  
セプターは何人？」

マユミ：「えーっと、300人から集めたコンセプトをアップしたんだけど。」

ユリ：「それってさ、バーチャルサイトからも情報集めてリンクしたんだよ  
ね。」

タイムムーブする直前。」小声で、「怪しくない？」眉をひそめるユリ。

マユミ：「メンバーを疑うの？」さらに眉をひそめるマユミ。

ユリ：「でも、可能性はあるわよ。3分あれば仕掛けれるもの。ボスがムーブ  
してからしばらくしてから人に関する未来データだけを抜き取り、タコスを使  
って送る、というプログラムを入れておけば。」

マユミ：「なるほど。でもなー、そもそもなんで2040年の海底都市テーマな  
んていう想像情報から人の情報だけを抜く必要があるの？意味わかんない。」

ユリ：「ボスに依頼した商社、名前なんだっけ？」

マユミ：「確か、マーカス リサーチとかなんとか。」

ユリ：「うーん、名前からして怪しい。私はその会社と疑いたくないけど  
ケンジを調べてみる」「というか、私の専用ネットで、今検索中。」と言いな  
がら

いつも持ち歩いているスマートデバイスで自前ネットに接続していた。社名検  
索。ユリはシナリオメイクを仕事としているが、情報を取り戦略を造るスピー  
ドは天性のものがあるのかもしれないとマユミはいつも思っていた。

ユリ：「おっ…と、これは、まずそうよ」

マユミ：「何が？」真剣な表情で聞きかす

ユリ：小声で「カフェ変えない？」眉をひそめるユリ。

## 位置情報—マーカス リサーチ社

マーカス：「未来総合プラントプロジェクトに関わる技術と人物を特定できた  
か？」会議室の窓際に立ち、マーカスは横にいる部下に尋ねた。

マーカスの部下：「はい。タイム・ムーブ技術をもつ2社を競合させておりま  
す。

しかも、1社は2040年で海底都市、1社は2050年で宇宙ビジネスをテー  
マ



にしてムーブさせ、そこに関わる共通の人材と技術情報だけ弊社に入るように仕組んでおります。」

マークス：「よし、この情報でコンサルティング商社としての我々も50年は安泰だ。2社は気の毒に、未来情報など青臭い事を言ってるから、このように利用され信用もなくなるのだ。まあ多少の金額は出してやれ。クライアントでもあるしな。ふははは。」

## 位置情報ータイム・ムーブ・ジャパンー

タイム・ムーブ社内では、マークス社今回の分析をおこなっていた。

トオル：「でも、ボス。話を聞いていると、そのクライアントですが、もしうちの情報を彼らが意図的に盗んだとすると、それって違法では？」

俺：「その通り。我々タイムムーブするものは、いくら想像、コンセプトとはいえ現在の顧客がそれを信じて購入、又は働きかけをしたときに未来からの情報

価値となり、責任を生じる。今は法規制がなくても、それを悪用したり、純粋な人のアイデアや発想を横からだまって奪い取るのは卑怯だ。」

トオル：「そ、そうですよね」

俺：「タイム・ムーブ社の規定でも未来情報を自己の営利目的や改ざんして顧客へ流すことは禁止されているし、その為に他のコンセプトターとの情報を連結させて個人の空想データとして処理させないことにしている。」

トオル：「しかし、彼らの目的と手段がまだ見えませんね。」

ケイン：「おおっ、ボス、何やら怪しいホログラムメール届いてますよ。」  
「これは、他のタイムムーブされてますね。俺ら。そこからのメールだ。」

トオル：「つまり、同業他社の未来からのメールだと。」

ケイン：「タコスより相当すぐれもんだ。アンドピンチってこと。」

トオル：「なんで、メールがピンチなの？」

ケイン：「お前馬鹿だね。2050年から2025年の現代、我々へホログラムメールを通して、我々の2040年の未来データを全て奪えるんだよ。」

トオル：「アタックじゃないですか！」

ケイン：「そう言ってるんだけど。」

俺：「最低限の記録を取れ、相手を特定しろ。」

ケイン：「やってまーす。」

トオル：「ボス、反撃しましょうよ。」

俺：「いや、待て。相手が特定されないと。マーカスの目的もだ。もしかすると

ダブルで依頼している可能性あるな。」

ケイン：「ボス、相手わかりました。泣く子も黙るワールド アイズです。」

俺：「なんだと！」

ワールド・アイズ社はタイム・ムーブ社の技術を有するパートナー会社ありさらには、世界的大企業 G 社のグループ会社でもある。独自のムーブテクノロジーを持ち、コンセプターも世界中に登録しており、約2万人の能力者の内、10%は 100 年レンジまで未来データを描けく為に常時待機している。

現在、世界中のかつてのメーカーやコンサルティング会社が、このワールドアイズの情報に頼っている。AI やクラウドテクノロジーはその情報整理インフラとなっている。

俺：「よりによって、ワールド・アイズか…利用されたか」

トオル：「ボス…」

俺：「タイム・ムーブ社のピーターに連絡。応援を…」

その時、オフィスのドアが開いてユリとケンジ、マユミが戻ってきた。

マユミ：「その必要はないわ。」

マユミ：「会社調べてみたの。マーカスの目的は、世界エネルギー機構が推進している未来統合型プラントのコンサル利権よ。今後50年の食料生産、海底エネルギー、気象コントロールをおこなえる動く自動制御島ね。そこにライフはないわ。生活に困っている人や高齢者、新しいビジネス開発者などへ地価や天候影響も受けずにある程度の期間生活をおこなえる、新しいライフスタイルを提案していた学者や技術者の未来リストを我々から奪い、圧力をかけたのね。まだ何もしていない人やアイデアを食べ物にするなんて、私たちの価値観とは真逆よ！」

ユリ：「そこで、手段なんだけど。」とケンジの襟を捕まえて、

「知らないうちにワールド・アイズのプログラムをタイムロード前、3分間にダウンロードしてたわけ。さっきのホログラムメールアタックもその仕掛けのうち。」

ケンジ：「ご、ごめんなさい」

ユリ：「うっかり君、能力は身に着けておかないと、こういう結果になるのだよ。」

トオル：「なるほど。って、ワールド・アイズもデータは取れなかったわけでしょ。」

俺：「いや、そうでもないさ。マークスネタを理由にうちの未来データを取れたんだから。」

俺：「よーし、状況判った。みんな、やるぞ。反撃だ！」

全員：「おっしゃー！ 待ってました！」

## 位置情報—マークス 移動車内

マークス部下：「社長お電話です。」

マークス：「移動中だぞ、後にできないのか？ どうした？」

マークス部下（電話）：「それが、社長、社内が大変な事に！ 急いで戻って来てください！ 2100年からタイム・ムーブされ、我々のやってることがネットでリーク、コンセプターと連動して今の株式が暴落です。」

マークス：「何っ！」

「ばかな！ タイム・ムーブ社は過去にムーブできる技術はない。能力者も50年までのはず。」

## 位置情報—オフィス

ケイン：「ホログラフ モード オフ」

トオル：「タコス バージョン2 オフ」

ケンジ：「コンセプター接続解除」

マユミ：「設定2100年 テーマ マークス・リサーチ 解除。」

「ボス、お帰りなさい。」

俺：「うっ、まだ意識がはっきりしない、今日はいつだ？」

トオル：「さすがに、ワールド・アイズのアダプタは倍の威力があるよな通常の2倍の年数の100年レンジでムーブできるんだから」

ユリ：「それだけじゃないわよ。ケンジがワールド・アイズのコンセプター1万人を集めてボスのマークスをやっつける未来データに参加したのよ。」

俺：「そのワールド・アイズにお願いをしたのは、タイム・ムーブ社のピーターらしいけどな。」

トオル：「まさに、総力戦勝利ですね」

「総力戦勝利と言えば？」

俺：「言えば？」

トオル：「全員焼肉に決まっているじゃないですかー！」

俺：「決まって…」

全員：「賛成！」

俺：「はいはい。ところでクライアントから入金されたっけ？」 —END—

## 4. バーチャル・エリア

会社へ向かう前、自宅の web-pc へ上司であるタイム・ムーブ社 VP のポールから

ホログラフフォンが入る。

「おやよう、ユースケ」

「こんな朝はやくに珍しいな、ポール」

「君が知らないところで仕事しているだけさ。ところで、ユースケ、2040 年の海底都市テーマ依頼はどうなった？」

「レポート出してあるよ」

「レポートは形だけって、暗黙知だろ。実は、ライフカードとバーチャルネットワーク

をいよいよ連動させることになってな。」

「やっとか。」

「でも、バーチャルネットに繋がるとエリアネットともつながり未来データとエリアが

より連動できますね。」

「いや、想像空間は確かにバーチャル空間と近い関係にはあるし、ホログラフィックで

共有できるが、データのもとが違う。こちらは未来への意識、バーチャルはリアルからのデジタルデータだ。」

「それが？」

「ライフカードは知ってるよな？」

「もちろん、全世界共通のプラットフォームで動く国民カードで、健康・年金・支払い・行政手続きなど全て共通サービスでおこなえるし、サービス手数料無料だ。2021年の法改正

でAIの軍需利用禁止法や利用制限法と生活に必要なサービスを提供するライフカードプラットフォームを全世界で規定したものだ。」

「最新のそのカードには、ワールド・アイズ社のホログラフィックス通信チップが組み込まれているんだよ。」

「つまりだな、カードに種を仕込んでばらまいて、新しいサービスはタイムムーブして見つけてクライアントに売り、その対象が企業未来だけでなくエリア未来にも及ぶということだ。」

「その上で海底都市テーマの話をしている、もう一度調べてみてくれ。」

「なるほど、ポール。参考までに、そのチップはどこで開発しているかわかるか？」

「なんでも日本らしいぞ。技術の国じゃないか。とにかく再ムーブも許可するから調べてくれ」

俺が会社に着くと、トオルが

「あっ、ボス。お客さん来ていますよ。」

「今日は、アポなかったはずだが…会議室？」

「はい。なんか地方自治体の方らしいですよ。」

エリア未来データの話か？

位置情報一会議室

「はじめまして、新潟県バーチャル支援開発室 室長のタナベです。突然お邪魔して

申し訳ありません。」

「イマダです。それはいいのですが、どのようなお話なのですか？」

「実は、もうご存知かもしれませんが県下にある半導体メーカーの企業が、ライフカード



の通信技術の特許を持っているのですがライフカードを使ったワールド・アイズ社のサービス利用料を払わないと、その特許期間が有効にならないのです。」

「別に、自治体には関係ない話じゃないですか？困るのはその企業でしょ。」

「そうなんです、そのサービスというのがエリア未来サービスでして。我々地方行政としてはライフカードのプラットフォームで健康・保険・年金などのサービスをやっているの、

困るのです。そこで、タイム・ムーブして頂き特許期間とエリア未来サービスを特定して

頂きたいのです。そうすれば交渉もスムーズにおこなえ住民にも迷惑かけずにすむと。」

「なるほど。つまり、ワールド・アイズがその何とかという半導体メーカーと組んで、脅しているというわけですね。特許期間を探り、ついでにそのサービスを利用した県のエリア未来データをイメージしてほしい。ということですね。対象年は？」

「2050年」

## 位置情報—オフィス

俺：「と、まあ、こんな話だ。」

マユミ：「なにそれ。結局、都合いい話を聞かされてるだけじゃない。」

トオル：「おとなの打合せはそーいうものかと。」

ケイン：「タイムムーブしなくても、その企業特許の裏を調べればすむことじゃないの？」

あとは、適当に理由づけして断れば？」

マユミ：「そうそう。そもそも想像世界をイメージングしている私たちの目的と、ズレてるわ。これじゃスパイじゃない」

俺：「ケンジ。タイム・ムーブ技術を利用しての個人情報の取得は禁止されているよな？」

ホログラフィック通信を通して想像データと行政サービスデータをバーチャル層で繋げることは可能か？」

ケンジ：「技術的には可能ですね。でも、繋げても意味がないし。社内規制されてるし。

現実世界での法規制でアウトですよ。」

俺：「つまりあれか、個人情報未来データから抜いてもバレなきゃオーケー。それを自治体に販売し、バレたらライフカードに個人識別するチップを組み込ませたメーカーのせいにする。それと引き換えに特許期間を承認ってどこか。」

マユミ：「もしかして、それって、海底都市事件と関係しているかも？」

俺：「なんとも言えんが。地方がテストモデルにされているかもな。」

俺：「よし、今回マユミとケンジで新潟のメーカーへ出張に行ってくれ。表向きはタイム・ムーブ社からの開発検討打合せとかで、ワールド・アイズ社と自治体の関係を探れ。」

それをもとにタイム・ムーブしよう。」

マユミ：「会ってくれるかしら。私たちコンペよ。」

俺：「会うさ。コンペからの依頼はチップの売上にもつながるだろうよ。」

マユミ：「ケンジ、先方アポとロボットカーの予約して、ホログラフ通信機能付きのやつ。」

位置情報—新潟県 渋谷電子工業—

開発担当者：「連絡頂きありがとうございます。開発担当のイケガミです。弊社の技術にご興味があるとかで。」

マユミ：「それはもう。我々もタイム・ムーブ社の技術だけでは今後のクライアントへの展開が難しいと考えておりますので、是非御社の技術もお聞かせ頂き、参考として開発部隊へ

連絡させて頂きたいと思えます。」

開発担当者：「ありがたいお話です。では、試作品をお見せ致しましょう。こちらへどうぞ。」

マユミ：「ありがとうございます。」

ケンジ、マユミとその担当者は打合せの場所から出て、別の建物に案内された。そこは

今までの建物とは違い完全通信遮断された、開発棟だった。

ケンジ：「すごいな。でも、これじゃ、ムーブテストはできないな。」

開発担当者：「どうしてです？通信遮断はみせかけですよ。意識層への接続は通信技術を使いません。ホログラフ画像から取りこまれたバーチャル通信でおこないます。」

ケンジ：「それでもどこかで物理的な通信はおこなう必要ありますか？」

開発担当者：「どこかではね。私たちは提供しません。言うなら視覚センサーと意識層

をつなげる役割ですかね。これが、その試作器です。」と言いながら、机にある小型モジュールを取り上げて見せた。

マユミ：「でも、個人情報と未来データを繋げるのは法規制されているのでは？」

開発担当者：「ええ。でも、私たちが直接サービスをする訳ではないので、そのあたりの詳しいお話はお答えかねます。」

マユミ：「その他の機能はどのような？」

開発担当者：「スコープ機能です。範囲を特定してエリア全体にホログラフ一斉通信、その逆もできます。」

ケンジ：「昔の携帯電話キャリアサービスですね？」

開発担当者：「まあ、似たようなものです。試作器については以上ですが、御社で開発利用

いただけるなら詳しい資料を送らせて頂きます。」

位置情報一口ロボットカー車内

ロボットカーの中、マユミはwebデバイスで報告書を入力・編集していた。

横でしているケンジが何やら技術資料を閲覧していた。

ケンジ：「やっぱり、一泊していきましょよ。疲れましたよ。」

マユミ：「何言ってるのよ。あんた、今回なにもしてないじゃん。」

ケンジ：「突然ですけど、マユミさん。ひとつ聞いていいですか？」

マユミ：「な、なによ急に。何もあげないわよ。」

ケンジ：「タイム・ムーブ装着資格取ろうとがんばっているんですけど、想像力って

資格いるんですかね？ボスのようにはなかなか出来なくて…もっと未来を考えられる力が欲しいと、マユミさんは何でこの会社に入ったんですか？」

マユミ：「…焦ることはないわよ。意外と未来データをイメージングといっても、今日のように実務をやってると一番現実的なとこしか見れなくなって。想像なんてほど遠いかも。」

だからやっているのかしら、バランス？ あとは…」

ケンジ：「あとは？」

マユミ：「ボスがいるからかな？」

ケンジ：「そこは一緒ですね。」

マユミ：「だから、焦らずがんばんなさい。あなたもコンセプターの1人なんですよ。」

ケンジ：「はい。」

ケンジ：「しかし、なんか雰囲気悪い会社でしたね。」

マユミ：「確かに。ファクトリーってあんな感じじゃない。でも、ヒントはあったかも。」

ケンジ：「ええ？何か、ムーブに必要な情報取れました？試作機みただけですよ。」

マユミ：「技術者は試作器を見せたがるものよ。タイム・ムーブ社もブランド化されてきたのね。でも、あれは収穫よ、これでボスに報告できるでしょう。」

マユミ：「さて、地元の美味しいもの食べに行こうか」

ケンジ：「あのう、そろそろ東京なんだけど…」

マユミ：「えっ？もう。それより、あんたロボットカーの支払い登録、会社でしたわよね。」

予約時にやらないと個人支払いになっちゃうんだからね。だから私は予約しないのよ。」

ケンジ：「大丈夫ですよ。個人って言われても支払うお金ないから」

マユミ：「よろしい。では、ボスとホログラフ連絡しましょう。」

ケンジ：「さっき連絡あって、今日はもう寝るとのことでした。明日会社横のカフェ

10:00と。」

マユミ：「それを先に言いなさいよ！」

## 5. 未来データ加工

ーオフィスの近くのカフェー

ケンジ「…という訳ですけど。」

マユミ「あんた、何勝手に話端折ってるのよ。まあ、私の出したレポート通りです。」

俺：「なるほど。つまりマユミの出したレポートをまとめるとこういうことか。」

「ワールド・アイズ社が地域行政バーチャルサービスを利用して一儲け考えていると。未来データから抜いた個人情報と、渋谷電子工業の特許期間延期をえさにして。」

マユミ：「でも、しっかりこないのは大企業のワールド・アイズ社が違法行為である未来データからの個人情報抜きをやるかしら？それと、渋谷電子工業の技術ほしいなら買収すればはずですよ？」

ケンジ：「大企業だからやるんじゃないですか。小さい会社は怖くてできませんよ。」

買収しないのは、万が一の責任を渋谷電子に押し付けるためでは？」

俺：「ケンジ。グッドシンキング。」

俺：「ということは、うちが今回タイム・ムーブする条件設定は？」

ケンジ：「う～ん、ということは、つまり…え～」

マユミ：「あっ！もしかして ボス…それって」

俺：「マユミは解ったようだな。会社に戻って、タイム・ムーブの準備だ。今回は本社の許可に時間かかりそうだ。」

—会社の研究室—

トオル：「タイム・ムーブ設定 2050年 新潟エリア、ホログラフ アクティブ、タコス オン」

トオル：「ねえ、マユミさん、こんなざっくりでムーブさせていいんですか？」

マユミ：「いいのよ。ボス、起動します。」

一瞬、研究室のモニター画面が光を放ち、イマダがムーブされたのが確認できた。ホログラフィック映像受信まで少し時間がかかる。

マユミ：「ケンジ コンセプター集合準備いい？」

トオル：「コンセプターって？ いまムーブ中ですよ。」

マユミ：「ダブルムーブよ。」

トオル：「えっ？」

ケンジ：「タイム・ムーブ本社とのホログラフィック共有設定できました。本社の能力者にムーブリンク中。条件は2050年、ワールド・アイズ社バーチャルエリア。」

ケンジ：「ボスの未来データと本社能力者からの未来データをつないでコンセプターにイメージ補正させます。」

ケイン：「ホログラフ出力開始。出るぞ」



—2050年の新潟エリア

俺：「うっ、まぶしい。なんだ、この光は？」

目の前をものすごい光を放ち、移動していく物体が現れた。

周りに目をやると、どうやら空港らしい。しかもスペースポートだ。

2025年にも米国議会がスペース航行法案を決議していたが、まだ参加国が少なく、スペースデリバリーサービスも始まったばかりだった。あれから25年、宇宙への関心が高まり

、大気圏外旅行者も増えはじめ、他の惑星への移住計画も小規模から中規模になり、各国もスペース法案に賛同し、宇宙通信ネットワーク事業会社、宇宙ファクトリー、宇宙ホテル事業も拡大している。しかし、スペースデリバリーとエリアバーチャルが結びつかない。

そのスペースポートに、1機のスペースカーゴが着陸してきた。相当巨大だ。着陸後、貨物室から運搬ロボットが取り出してきたものは、生鮮食品と蓄電池等のエネルギーユニットだった。それらの部品には、あの海底プラントで見たマーカス・コーポレーションの名前が刻まれていた。さまざまな新種類・新品種の穀物シードも運んでいるようだった。また、スペース・カーゴには巨大企業G社とワールド・アイズ社名も。映像が移り、ある建物が現れ、中にいる一人の男がズームされた、どうやらここの管理者のようだ。ネームタグにはワールド・アイズ社 バーチャルエリア アジア担当部長とある。

俺：「この顔は、レポートで見た顔だ。確か、渋谷電子の…うっ」

また強烈な光が目の前に差し込まれ、一瞬気を失う。

どうやら、現在に戻ったらしい。

—オフィス会議室—

トオル：「バーチャル・シティは2015年から全世界の大都市から徐々に増え始め

最初はコマースからでしたが、さまざまなサービスをつなげるマイクロサービス化が

2020年に急速に進み。オリンピック開催前後には20か国のエリア接続が可能となっています。現在2025年は100か国、エリア数は数えきれません。スペースポートも2015年頃から準備され、スペース法案が可決されると宇

宙輸送を含むスペースデリバリーとスペースネット通信ビジネスがベンチャーを中心に2020年以降本格化されました。以上」

ユリ：「すばらしい！」パチパチと手を叩く。

俺：「いまの説明からも、どうやら、今回の話の流れが見えてきたぞ。」

トオル：「そうっすか？僕には全くみえないな〜。」

マユミ：「あんた、頭つかいなさいよ、ただ、聞いてるだけじゃダメなのよ。聞いてるだけじゃ。」

トオル：「そうだったんですか？会議って、聞くことじゃなくて、頭つかうものなんですね。発見した、メモッところ。」

マユミ：「なんか、腹立つな〜」

俺：「プレイヤーは、意外と渋谷電子工業のワタベとマークスだ。目的は、海底プラント

で造った食料とエネルギーを将来宇宙移住する特定の人間のみ運ぶためだ。」

「日本のエリアバーチャルをテスト利用して、ライフカードで個人情報だけ未来データから抜き選別。金持選別さ。」

「そして、イケガミはワールド・アイズの人間だ。」

ユリ：「ビジネスモデルとしては、よくできてるね。ワールド・アイズがサービス利用で儲かって、実は宇宙人材の人選をして、マークスが食品とエネルギーをプラント製造するための宇宙データを渡して儲けて、渋谷電子が世界共通ライフカードの patents で儲けて、実は裏でみんなつながってましたと。違法だけどね。規制する組織は未来じゃないとわからないし、想像空間からバーチャルエリア空間の一種犯罪よね。」

ケンジ：「関心している場合ですか、我々のデータを抜かれて、そんなことに利用されるのは気分悪くないですか？」

マユミ：「気分の問題じゃなくて、ビジネスの問題よね？ボス？」

俺：「そう。俺らも彼らのビジネスにのせてもらおうじゃないか？」

俺：「ユリ、新潟県と同じような条件でテストエリアで最適な県を探してくれ。それと中国の大手食品製造会社の情報、できるだけ巨大なほうがいい。」

俺：「ケインはダミーホログラフを手配。うちが制作したことがばれないように。トオルは新しいタコスをインストール。残りはタイム・ムーブの準備だ。」

全員：「了解！」

—渋谷電子工業 新潟本社—

イケガミ（電話）：「あっ、先日はわざわざこちらまでお越しいただきありがとうございました。弊社の技術資料をお送りしましたが、早速ご検討いただけるようで」

マユミ：「はい、こちらこそ。つきましては、こちらで御社の試作器を使いテストをしてからタイム・ムーブ社本社へ正式開発契約とさせて頂きたいのですが…」

イケガミは話終わると、部屋から離れ、通信遮断の別棟に入り専用のホログラフフォンに切り替えた。

「オレだ。また、新しいバーチャルエリアが取れそうだ。しかもタイム・ムーブ社のクライアント絡みだ。」

「スコープ機能は、新潟と同じサイズのエリアのようだから機能追加はしなくていいだろう。クライアントは中国の食品製造業者だから日本の品質ブランドを通して…そう、海底プラントと同じモデルだ、海底プラントが中国プラントになるだけだな。」

「しかも、テストはタイム・ムーブ社がするんだと。試作器は多めに配らないとな。はははは。地方自治体へ調整はたのんだぞ。」

—数日後、イケガミの web-pc のメール

マユミ（メール）：「イケガミ様、通常メールにて失礼致します。試作器が届いたのですが、どうやら何度テストしてもスコープ機能が動かないのです。大変申し訳ないのですが、御社の方でバーチャルエリアのご確認いただいてよろしいでしょうか？また、テストとはいえ、先日お送りした評価契約書通り、前入金頂きたいのですが、そちらもあわせてご確認くださいませよう。」

イケガミ：「なんだと？」

イケガミは慌てて、ワールド・アイズの技術担当部下に連絡させバーチャルエリアのスコープ機能を再確認させた。

イケガミ：「どうなんだ？正常動作しているのか？」

部下：「は、はい。チップのスコープ機能は正しく動作しております。然し…」

イケガミ：「然しなんだ？」

部下：「バーチャルエリア情報の方がダミーです。」

イケガミ：「そんな、では、そんなエリアはないと。」

部下：「しかも、このやりとりを通常通信回線で記録されてます。」  
イケガミ：「さっきのメール、くそっ。あっ、支払いは、支払いはされたのか？」  
部下：「契約承認後自動出金される仕組みなので」  
イケガミ：「先方を訴えてやる、連絡しろ」  
部下：「それは、まずいかと。渋谷電子工業としては問題ないし、そもそもこちらが  
違法行為しているのが公になってしまいます。」  
イケガミ：「くっ」

—オフィス内—

トオル：「いや～、いまくきましたね。」  
俺：「これで、しばらくは地方を利用して未来データを悪用することはないだろう。」  
「お金も取れたし。ん、新潟県からもいくらか取るか？」  
トオル：「なんか、ボスが一番、悪党にみえてきた。」  
全員：「そりゃ、言える（笑い）」

TIME MOVE（第5話）

## 6. 会社と組織

—位置情報—タイム・ムーブ社 オフィス—

「あれ、ボスは？」午後から入社したユリが、デスクに鞆をおきながらトオルに尋ねた。  
トオル：「えーっと、週末まで米国本社で会議らしいですよ」  
ユリ：「そんなのいつも ホログラムミーティングでいいじゃん。社内会議と移動ほど非生産性なものはないとまだ気がつかないのかしら？」  
トオル：「なんでも、今回は特別な会議らしいですよ。ちらっと聞いた感じでは、

想像空間にある、〈未来データ〉をタイム・ムーブ社とワールド・アイズ社で共有化させて、合併会社 スペース・アイズにするとかしないとか？」

ユリ：「はあ？ そんなの実質的な買収じゃない！」

トオル：「まあまあ、落ち着いて。噂です噂。」

ユリ：「でも、冷静に考えてみると、コンセプト2万人を有しているワールド・アイズとタイム・ムーブ技術をもっているうちで睨みあっても得策じゃないという考えもあるわね。」

ユリ：「でも、マユミは複雑ね…」

トオル：「なんで？」

ユリ：「あんた知らなかったっけ？マユミって、元、ワールド・アイズの社員よ。」

トオル：「えっ！！」

ユリ：「皆には、自分から言う訳ないか。」

トオル：「そうか、だからボスと一緒に本所に。」

「あっ、そうそう、ボスからユリさんにことづけ。いない間に2080年の未来年表まとめておいてくれって。」

—位置情報 タイム・ムーブ社（米国本社） 役員会議室—

ピーター：「マユミ、今回本社に来てもらったのは、元ワールド・アイズのコンセプトとしての意見を直接聞きたかったからだ。」

「今回の未来データの統合、君はどう思う？」

マユミ：「私個人は反対です。想像空間の創り方は様々なやり方があって巨大企業1社が独占するのはおかしいと思います。でも、経営のお立場でいうなら検討もありかと。宇宙マーケットは想像力を掻き立てるいいチャンスかと。」

ピーター：「ユースケ。君の部下は、本当に優秀だな。」

俺：「ありがとう。」

ピーター：「然し、いささか優秀すぎるな。元ワールド・アイズの社員として聞いているのだ。」「もう一度聞く、ワールド・アイズの元コンセプトとしてタイム・ムーブ社の技術力は底値と踏んでいるのかね？」

俺：「ピーター、聞き方あるだろう？」

マユミ：「ボス、いいの。当然よ。ワールド・アイズにもムービング技術はありますが、なんといってもコンセプターが2万人いることと資金が豊富なことです。クライアントの依頼に能力者が想像し想像空間に初期イメージを生成しても、コンセプターの補正数が多い方が有利です。タイムムーブ社もムービング技術のさらなる段階に進むか？先方と組んでコンセプターの数を増やすか判断すべきです。私は元ワールド・アイズ コンセプターとして前者を選びます。」

ピーター：「素直な意見ありがとう。そして、悪かった。」

「2人とも、こっちに来てくれ。」

2人が案内された部屋は専用エレベーターで降りた地下3Fの特殊研究室だった。

研究室の中では20人ほどのスタッフが忙しそうに働いていた。

ピーター：「これが、新しいタイム・ムービング・テクノロジーだ。まだ非公開だが我々はコンセプト・メーカーと呼んでいる。それでは、開発担当のスコットを紹介しよう。」

ピーター：「スコット！ ちょっと来てくれ。」

スコット：「はい。」

ピーター：「今回、日本支社長兼バーチャルアジア統括部長になったユースケとコンセプト統括リーダー兼データサイエンティスト ユリ に新しいシステムを説明してくれ。私はこれで失礼する」

俺：「ピーター、聞いてないぞ」

ピーター：「おっと、それとバーチャルアジアの管理メンバーとしてあと2名追加していいぞ」

俺：「ピーター、アジア統括って急に言われてもな、責任もてないぞ。」

ピーター：「ユースケ、責任持てなどいつ言った？俺らもチームだろ？できるところでいいよ。俺も、今日付けでCEOになった。聞いてなかったよ。うまくいかなかったらお前のところで捨ててくれ」

と、ピーターは手をかざして言いながらエレベータに向かっていった。

スコット：「では、ご説明します。」

「大きな機能は、想像空間とバーチャル空間をあたかも1つの未来データから取得しているように高速処理でつなげられる点です。」



また、装着端末はかなり小型化され、可搬運用となり、アダプタも3倍のレンズを持ちます。

そして、宇宙通信ネットワーク、スコープ機能、セキュリティ機能に対応させていますが、従来通り、個人情報取得や過去へのムーブには制限がかかります。」

マユミ：「つまり、1人の想像能力者のイメージを瞬時にコンセプターのイメージと連動、未来データとして保存可能、しかも、基本想像能力期間の3倍を増幅できると。」

スコット：「その通りです。」

俺：「わかったが、これさえあれば、支店に配置してある研究室のタイム・ムーブ機材はいらなくなるし、管理する人も不要では？」

スコット：「いいえ、そうはなりません。コンセプトメーカーは、今説明しました通り、世界中からのコンセプターと能力者のイメージを瞬時につなげるクラウド技術とお考えください。今までの端末も接続用として使えますし、新しい端末では衛星回線を使用してダイレクトでホログラフィメージ出力・未来データ入出力がおこなえます。」

俺：「よくわかenらすが、パワーアップしたということだな。」

一位置情報 数日後のオフィス内ラボー

トオル：「コンセプトメーカー テスト起動 」

横からトオルの操作をのぞき込んだユリが、

ユリ：「うわっ、コントロールパネルがまったく違う」

トオル：「ちょっと、じゃましないでくださいよ。」

ユリ：「はーい。」

トオル：「タイムムーブ 設定 2150年 テストモジュール 送信」

トオル：「コンセプトメーカー ホログラフ オン」

トオルのweb-pcのホログラフ画面から真っ黒な空間が出始めた。

ユリ：「何よ、新しいシステムとかって、真っ黒い表示だけ？失敗作じゃないの。それとも2150年地球は滅んでいるとか。」

トオル：「だから、テストですよ。それでも、おかしいな…説明通りに操作しているはずなのに。」

黒い空間の奥から無数の光が広がり始めた。やがて、それは数えきれないイメージが、まるで写真を空中を浮遊しているかのようにぐるぐる放射状にこちらに向かってとび出していた。

トオル：「しまった！テストモジュールが古かったんだ。コンセプターがイメージと同調できずにホログラフ化されてしまっている。だから、なんでも最新・自動化はやなんだよ。」

ユリ：「どうすんの？」

トオル：「送信リセット？」

ユリ：「パソコンじゃないのよ、大丈夫？」

—位置情報 オフィス リアル会議室—

俺：「コンセプトメーカーへの接続は、この新型端末のみでおこなうように」と、2台のウェアラブル端末を机に置いた。

ケンジ：「でも、ボス。能力者しか利用できないんですよね？」

俺：「コンセプトメーカーから能力者とコンセプターのリーダーが利用できるようになった。」

ケンジ：「リーダーって？」

俺：「マユミだ」

「それと、新しくチームに仲間が加わることになった。アジアバーチャルエリアの担当だ。今日の打合せは以上。」

トオル：「以上って、質問あるんですけど？というか質問だらけなんですけど。」

ユリ：「ボス、ちゃんと説明をする責任あるわよ。いったい本社で何を話してきたのか。」

トオル：「そうっすよ。それだと、今までの大企業体質と同じじゃないですか。」

俺：「そうだな。わかった。」

俺：「実は、本社のピーターがCEOになった。社内で飛び交っているワールド・アイズとの買収話も無くなった。うちはテクノロジーで押していくらしい。」

「とはいえ、それは表むき。内実は皆も知っている通り、その逆だけだな。」

「ピーターとしては、今までのコアテクノロジーだけでなく、コンセプターのイメージをすばやく取りこめる新しいサービスとしてのテクノロジーと人材を創りたかったようだ。それが…」

トオル：「今回の、コンセプトメーカーであり、コンセプトリーダー人材の確立なのですね。」

俺：「その通り、しかし、ピーターも悩んでいた。ワールドアイズはコンセプトを2万人すでに有して、うちとの一応パートナー契約会社でもある。利用次第ではビジネスの拡張も可能だが、昨今のかれらの経営思考や運営、技術力をみて判断したのだろう。」

また、コンセプトリーダーも適任者はいたが、元ワールドアイズ社員だ。考えた抜いた末、マユミ本人とも会い、コンセプトメーカーの開発を進めていたのだろう。非常にリスクが高いと思うが、さすが、ピータだよ。」

マユミ：「みんな、今まで黙っていて、ごめんなさい。過去はみない、というこの会社の方針についつい甘えていたわ。時には過去も必要ね。ごめんなさい。」

トオル：「マユミさんが誤るはなしじゃないですよ。」

俺：「それとな、ピーターの悩みは、もう1つあってな。バーチャルエリアだよ。うちには、その営業力が足りない点だ。クライアント依頼から未来データを生成してもリアル、つまり現時点・現企業への販売が多い。バーチャルエリアだと未来時点間でもポイントにして効果測定できるし、バーチャルシティやエリアで販売が可能となる。」

ユリ：「それに対応する人材が今回のアジアバーチャル担当ってことね。」

トオル：「いつから来るのですか？場所はどこですか？」

俺：「実は、もう来ている。場所はタイム・ムーブ・シンガポールだ。」

全員：「えっ！」

## 7. ミッション・ショック

一位置情報 タイム・ムーブ社 シンガポール

未来社会ではバーチャル・エリアをビジネス拠点し、未来データの取引をするケースが多くなってきていた。つまり、未来社会のビジネスでは、更に先の未来

のビジネスデータを想像イメージやコンセプトから抽出し、販売できる仕組みになっており、一番人気のエリアがシンガポールというわけだ。

もはや、現実社会は、その手数料で生活しているといってもいいだろう。そんな重要なエリアを任せられたのが新営業担当のロンだった。タイム・ムーブ社のエリア担当として、アジアバーチャル担当をシンガポール含め広域に任されたのだ、特にワールドアイズ社には敵意をもっていた。

社内メンバーにホログラフ・デバイスを通して、一通りのあいさつを終えるとロンはこう言った。

ロン：「みんな、はじめまして。私は、今回アジア担当営業を任せられました、正直、売上等の数字はどうでもいいです。」

全員：「ええっ？」

ロン：「未来を売る会社が数字目標なんかたてても意味がありません。それより、大事なミッションがあります。私とボスはそれを実現したいのです。

皆さんにはそれを協力していただきたいのです。」

マユミ：「それは何ですか？」

俺：「俺から言おう。」

俺：「タイム・ムーブして、タイム・ムーブ社シンガポールを潰してくれ。」

全員：「ええ〜っ！！」

—位置情報 とある居酒屋—

トオルとマユミが居酒屋でビール飲みながら、ロンについて語り合っていた。

トオル：「いやー、とうとうボス壊れちゃいましたね。それに、なんすか、あの麻雀みたいな名前のやつ。ボス洗脳されちゃっていませんか？」

マユミ：「うーん、うーん、なんか、しっくり来ないよね??」

トオル：「なに、しっくりとか呑気なことってんですか？自社を潰すタイムムーブしますか？」

「今回、装着資格も取れてマユミさんがタイム・ムーブするんじゃないですか。」確かに、タイム・ムーブ機器の装着は誰にでも扱えない。想像する力と信用があって初めて認められるのだ。ようやく自分もボスに変わってタイム・ムーブの資格を得られているにも関わらず、その最初の仕事が自社の未来を見るなんて…。

マユミは、以前自分の昇進時の時に CEO のポールと話した際、昇格理由をボスからの能力評価だと思っていたが、もしかして利用されているのかもと考えたことがあったが、そんなことを言い出したらきりがないと割り切って忘れていた。

マユミ：「これってさ、もしかして裏があるんじゃない？」

トオル：「出ました！ 裏シリーズ。ある訳ないじゃん、自社ですよ、自社！」

トオル：「クライアントや何か大儀があれば別ですけど、そもそも、自社の営利目的にムーブしたら法的にダメですよ？」

マユミ：「そ、そう…よね～」

ジョッキに飲み残っているビールを見ながら、答えにならない答えを返した。

しかし、数日後、タイム・ムーブをして得た情報では、

2070年タイム・ムーブ先であるタイム・ムーブ社シンガポールは、ワールドアイズ社になっていた。ボスとロンはこの情報を知っていたのだろうか？

当然、買収される予定だったシンガポール支社の支店長は退任になり、シンガポール社はなくなりタイム・ムーブ・ジャパンにてバーチャルエリア事業管理を統括することになり、タイム・ムーブ・ジャパンの社長はイマダ、統括はロンになった。イマダはもともとタイム・ムーブの日本支店の支社長だったので、組織的には変わらないが、実質的にはロンの上司にあたることになる。マユミは、元ワールドアイズの社員であったことから複雑な心境にあった。

ピーターやイマダと知り合ったころは、小さなベンチャーとしてのタイム・ムーブ社が大好きだった。だからこそ、大企業のワールドアイズから移ってきたのだ。然し、今のタイム・ムーブ社は最新のムーブテクノロジーを使いコンセプトターの同意も得ず、未来のM&A 情報を得て巨大会社になろうとしている。

果たして、これは自分が求めている会社だったのだろうか？トオルの言う通り法的にもグレーだろう、というか、よくてもだめだろう。自分でもわからない。しかし、マユミは一つの決心をした。

## 一 位置情報 タイム・ムーブ社 オフィス

早朝、イマダ以外まだ誰も出社していないオフィス。今日は午後外出があり午前中は会社で雑用をすまそうと出社していたのだった。そろそろ、目途が付きそ

うだと資料作成を終えようとした頃に、イマダのホログラフィック・デバイスが鳴る。仕方なく、受信ボタンを押すと、目の前に見慣れた映像が現れた。

ポール：「おはよう、ユースケ」

俺：「朝は“弱い”って言ってなかったか、録画メッセージでいいだろう。」

ポール：「いやいや、やはりリアルじゃないと、録画とリアルは伝わり方が違うからな。」「おかげで、シンガポールの件で弊社はワールドアイズ社を抜くことができそうだよ。」

俺：「それはよかった。それと、違いで言えば、未来のデータを販売しているのと現実データは違うのと同じだろう。謙虚さを売りにすべきだよ。」

ポール：「しかし、便利だから使うのだろう。TPOだよ。」

俺：「だが、自社の未来情報をタイム・ムーブするのは何か気が引けたよ。」

「一歩間違えば違法じゃないか、他社を利用しただけ、元社員マユミが可愛いそうだよ」

ポール：「何を言っているんだ、経営者は、これが王道だよ。」

俺：「でもな…おっと、マユミからだ、また連絡するよ。」

ホロウインドウを切り替えて、マユミとコンタクトする。

俺：「やあ、おはよう。ずいぶん早いね。どうしたの？」

マユミ：「おはよう。ボス、私、会社を作ることにしたの。」

俺：「な、なんだって！」

マユミ：「数人で小さな会社だけど、エム・ムーブ社という会社を私がやることにしたの、MはマユミのM。ついてきてくれる仲間もいるわ。私が会社をつくることはタイム・ムーブでわからなかった？ポールにも宜しく伝えてね。これからは商売敵なので。いままでお世話になりました。また、どこかでゆっくり話しましょう、というか話すべきよね、私たち、じゃあ」と、コンタクトが切れた。

俺：「お、おい、ちょっと、待っ…」

あまりの出来事ことで、頭が真っ白になったが、時間がたつにつれ冷静にマユミの言葉が頭の中で繰り返された。

もしかすると、自分は何も新しい未来を創れていないのかもしれないと。

未来へ、気づこうとする者、気づいて行動する者、いつのまにか過去に戻っている者、また気づこうとする者、その繰り返しが未来そのものかもしれない。

TIME-MOVE (第7話)-終わり-





# Mercury Vision

MERCURY VISION LLC/Y.NAGAKI©

## □ 3 ・ 未来プロジェクトと思考ニュース □

MERCURY VISION LLC© 2018

<https://www.mercury-vision.com>